

こぼれたタバコ

sanukisoba

車が道路の継ぎ目を乗り越えた時のショックでタバコの灰がジーンズに落ちる。灰を落とそうと灰皿を手にとった瞬間の出来事で、私は心の中で舌打ちをする。左の太ももの上に落ちた灰はまだ形を保っていたから丁寧に処理をすれぱうまく灰皿に入れることができそうだったのに、マサキがデリカシーのないレーンチェンジをしたせいで灰はコロコロと転がり、シートに落ちてその形を失った。私は心の殻を破った舌打ちをして落ちた灰を手で叩く。レンタカー会社に申し訳ないと一瞬だけ思ったがよく見ればシートにはタバコの焦げ跡もあるので少しは罪悪感が薄れる。

平日昼間の関越道はとても空いていて、私たちは草津から順調に東京に向かっている。

学部の3年次から交際を始め、私は卒業とともに就職し、マサキは院に進学。修士課程が終わるとともにマサキは就職をして、その数年後に私はこの人と結婚するんだろうな、などとあの頃は思っていたがマサキはそのまま博士課程に進学。私は順調に職場でのキャリア3年目に突入し、彼は博士課程での研究を続け、私たちは月に1度あるかないかのデートで交際を延命させていた。働き始めた女と院にこもる男の間では共通点があまりにも少なく、デートはいつも買い物か観光地へのお出かけだった。学生の頃は喫茶店で2時間も3時間も過ごせたのが嘘のようだ。

私がキャリア4年目を終える頃、マサキは博士号の取得を諦めていたが次に逃げ込む先は決まっておらず、いわゆる無職の博士課程任期満了退学が順調に生まれようとしていた。私も20代後半に突入していたわけで、そろそろ何かしらの方向は示していただきたいとは思っていたが、かといって20代後半に突入して無職の人間に果敢に攻め込むほどの図々しさを持ち合わせていなかった私は、結局ずるずるとした交際を穏やかに続けた。デートは相変わらずだし、ややもすると会話の数も減りつつはあった。友人に言わせれば交際が続いているのが奇跡らしいが、奇跡も続いてしまえばその輝きを失い日常に成り下がる。

びっくりするくらいの速度でやんちゃな車がやんちゃな音を立てて右の車線を疾走する。

マサキがアルバイトなどで食いつなぎ無職としてめでたく2年目を迎える頃私はキャリア6年目を迎えようとしており、度重なる友人知人の結婚式で出費がかさみ「他人の幸せで自己破産するんじゃないか」などとマサキにちょくちょく話していたことは覚えている。その頃はマサキも自分の人生に不安を感じていたらしく、就職活動を始めていた。私も就職のアドバイスを求められたりはしていたが、経済学部を出て新卒一括採用の波に乗った私と法律で博士課程を退学してから2年目に突入した男ではどこに共通点があるのかもわからず、ろくなアドバイスはできなかった。

結局マサキは卒後3年目の夏に法律専門書の出版社に潜り込むことができ、私は20代末期の結婚式ラッシュをボーナスなどの力を利用してなんとか乗り切ることに成功し、お互い30歳を迎えようとする年になってようやく腰を落ち着けることができた。そのお祝いも兼ねて私とマサキは2泊3日で草津温泉への旅行に出かけ、今こうして帰りの車に乗っている。

東松山のあたりにある大きな大きなネットの下をくぐる頃、私は再びタバコに火をつける。マサキにも勧めてみるが彼は運転中あまりタバコを吸わない。ゆっくりと吐いた煙がエアコンの風に吹かれて拡がる。

もともとマサキは口数の多い方ではなかったけれど、院を出てから極端に無口になったような気はしている。この旅行でも特に話が盛り上がることはなかったし、彼の今までの経歴を考えればそれもある程度は仕方ないのかもしれないと思う。博士課程を出てからどんどんと劣等コンプレックスの虜になり、就職が決まって少しはそれも改善するかとは思ったのに結局今の所変化は見られないけれど時間が解決してくれるのかもしれないし、別にそれでマサキが嫌いになるわけでもないで私は特に気にせず静かに草津の宿を満喫した。これからのことはこれからの時に考えればいい。

ジーンズや髪にかすかに残った硫黄の匂いが、ふとした瞬間に鼻をくすぐる。左車線を優雅に流すオープンカーには白髪の綺麗な老人の男女が乗っている。きっと夫婦であろう彼らはこれからどこかへ行くのだろうか。それとも帰るところだろうか。ちらりと表情を盗み見るとどちらも微笑みを浮かべていた。世界は淡々と後方へ通過し、車は淡々と前方へ進む。

タバコが数本灰皿におさまる頃、車は料金所を通過し、マサキは「タバコ、本数増えたんじゃないか」と私に言う。「そうかもね」と返事をし、箱を確かめると確かに心許ない本数しか箱には残っていない。「でも、職場では吸ってないし旅行にでも来ないところな本数は吸ってないよ」と付け加えると「そうか」と応えて再び運転に集中する。私は言葉の真意を掴みかねて少し考え込んだが、きっと大した意味はないのだろうか、と深く気にしないことにする。

変化に乏しい道路を進むんでいくうちに、車は緩やかな下り坂を降りて大きな道路の真ん中に合流する。宝塚の階段みたいだな、とこの道路を通るたびに思っている気がする。塀ばかり見せていたサイドウィンドウは自転車に乗った人や歩く人、ショーウィンドウやマンションを見せる気配りを私にしてくれる。今まで退屈な景色ばかり見せていたことへの窓なりのお詫びなのかもしれない。

先ほどの順調さと打って変わって地上の世界は車が満ち溢れていて、今まであまり活躍の出番がなかったブレーキくんが先ほどから引張りだこになる。マサキは相変わらずだが、ガスタंकを左に見たあたりで「ライター貸して」とタバコを啜る変化を見せた。「貸すだなんてとんでもない、火ぐらいいつでもつけてあげるよ」とマサキのタバコに火をつける。「悪い」と前方のトラックを睨みながらタバコを吹かす。キャスターの甘い香りが車内に拡がる。マサキのことは嫌いじゃないけれど、この香りにはどうしても慣れることができない。

景色が動いたり止まったりを繰り返し、車は少しずつ前に進む。のんびりとしたペースで黄色い電車の下をくぐる頃、唐突に「別れよう」とマサキが口に出す。銃弾のように私に突き刺さるその言葉の衝撃を肌で感じながら、啜っていたタバコを灰を落とさないうように口から離し、どうして、と教科書に書かれているかのような返事をしてしまう。こういう場合の対処法を習うとしたら高校3年生の2学期のあたりだろうか。カリキュラムを先取りしている進学校だと2年生の1学期くらいにはきつと終えてしまう単元だろう。「交際の終わり」とかいう項目で。私のいた学校はどうだったろう、習った記憶がない。車は目立って大きなビルの隣を通過する。

「申し訳なくて君とはこれ以上付き合えない」

「好きな人ができたとかそういうことなら素直に言って欲しい」

若干の混乱を抱えながらも私も冷静に弾を射つ。その弾は彼をかすることもなく「いや、そうじゃない」という彼の弾が私に命中する。私は混乱を深める。

「申し訳ないって、どういうこと」

「そのままだよ。俺とズルズル交際していることで君はいつの間にか30代に足を踏み入れようとしている。でも俺はようやく来年就職という状態だし、就職しても数年は結婚できないだろう。それまで君を待たせるわけにはいかないんだよ」

私は今までに一度でもマサキに結婚の話をしたことがあっただろうか。いや、なかったはずだ。反語法を用いてもそれは断言できると心の中で整理をしてから「結婚なんて気にしてないんだけど」と次の弾を射つ。私のオートマティックにはあとどれだけ弾が残っているのだろう。願わくば彼の銃がリボルバーであることを私は願う。精度は彼の方が勝る以上、私は数で勝負を仕掛けるしかないのだ。

「君が気にしていなくても、でもいつかは気にする時が来るかもしれない。それを避けるためには今ここで君を縛り付けておくわ

けにはいかないんだよ」

「ずいぶん、身勝手な話に聞こえるんだけど」

「身勝手な話だとは思うよ。でも今まで身勝手にやらせてもらって君に甘えてきた結果、俺は君を幸せにできていない」

「私の幸せって、何。結婚？」

刺激的な話を続けながら私たちの乗る車は大通りと交差し、小さな道路と交差する。交差点を経るたびに周りの建物は高さを増していく。ブレーキで体が前につんのめる時に体を締め付けるシートベルトがちよっぴり苦しいと感じる。この旅の間そんなことを感じたことは一度もなかったというのに。

「結婚は一つの例示だよ。それ以外も含めて俺は君を幸せにできる自信がないんだ」

「あなたがどうして私の幸せを定義したり、私の幸せを左右できたりすると思っているの？」

「定義もできないし左右もできないとはわかってるよ。そういうことじゃないんだ。君の幸せがどんな形であれ俺には君を幸せにできる自信がない、と言っているんだ」

「それが、別れたい理由？」

「そう」

私はタバコを啜え、火をつける。窓を全開にしてため息をつきながら煙を吐く。信号で隣に停まった車を何気なく覗くと、私と同年代くらいの女性がカロリーメイトを頬張りながら前方を凝視している。制服に身を包んだ彼女は、つまらなさそうにハンドルを指で叩きながら顎を動かしていた。車は再び前進に戻る。

「だから……」

マサキが話を繰り返す。

「一つ質問させて」

「いいよ」

「私が別れたくないと言ったら」

車は地下に潜って別の道路と交差し、再び地上に上がる。

「多分君は、そういうことは言わない。無為に時間を過ごすようなことはしないはずだ」

「今までの数年間は、無為じゃなかったっていうの」

細く長く煙を吐く。

「今までの数年間が無為だったというならば、やはり君は結婚とかそういう何かゴールを見据えていたということになるんじゃないのかな。だとしたらやはり俺は君を幸せにできない」

「ロジカルだね。とってもとってロジカル」

「ごめん」

「謝るほどの罪悪感を感じるならば何故謝らなければならないようなことをするのかロジカルに説明してほしいね。別れることはもう、前から決めてたんでしょ」

「うん」

私は新しいタバコに火をつける。思い返してみればマサキと交際を始めたのはタバコがきっかけだった。喫煙所で火を貸してくれと頼んできたマサキとなぜか話が弾み、気付いたら付き合っていた。その時からマサキはキャスターを吸っていたな。あの時に妥協せず嫌いなものは嫌いと言っておけばよかったのだろうかなどとジメジメした思考に私は陥っていく。

「未成年者の喫煙は、健康に対する悪影響やたばこへの依存をより強めます」と書かれたタバコの箱をぼんやり眺める。私の人生はこの後どうなるんだろう。結婚なんてあまり意識したこともなかったというのに、急に私は自分の人生に不安を覚える。隣を電車が並走する。信号も対向車も割り込んでくる車も何も気にする必要のない彼は心地よさそうに前へ前へと進む。彼は誇らしげに尾灯を輝かせながらビルが建ち並ぶエリアに消えていく。

「ねえ」

灰を落としながら、前方を見たまま、声を発する。

「もう一つ質問させて。あなたは、別れると決めた相手をどうして抱いたの。抱いている時どういう心境だったの」

マサキが言葉に窮するのがわかる。山手線の下をパスして車は前へ進む。沈黙を抱えたまま。やがて都電と合流する時マサキはハンドルを左にきるだろう。その時後ろを見る顔がどんな表情をしているのか、それがとても気になっている。